



Puzzzle文集 8

目次

ぶんぶんごま	1
集団的だわね	2
嗚呼ベイベ	3
タレを買いに	5
樵	7
自転車に乗って	9
オマージュ	10
コンチクショークソクライダー	11
サンタクロースイズ...	12
真っ赤お鼻の...	13
肉とマシン	15
梅干しは食えない	20
夜こわい	21
俺におう	22
我おもう	23
くびのけ	23
ラ・メゾン・デュ・トワレ	25
刈りたての小僧	26
親父不知	28
それでもいい	30
奥付	
奥付	34

ぶんぶんごま

うまくできないと言われても、教えようがないものがあるじゃない。例えば、ぶんぶんごまとかさ。あとは、そうね...、つまりぶんぶんごまの話だよ。

うまくできると気持ちいいけど、それ以上にやることがないものがあるじゃない。例えば、ぶんぶんごまとかさ。あとは、そうね...、つまりぶんぶんごまの話だよ。

俺はおまえの目の前で、紐に通された駒をぶんぶん廻す。

それ、面白いか？

やってみろよ。

おまえは両端の輪に指を通して、そいつを振り回しはじめる。駒はばたばたと暴れながら回転し、俺はおまえの失敗を確信する。そして、両端から紐を引けば、案の定、ばたばた暴れた駒がすぐに回転を止めた。

意外に難しいじゃねえか。

何度かやってりゃコツが掴めるさ。

大したことではなけれど、大したことではないだけに、できないことがやたらと悔しく感じることもあるじゃない。例えば、ぶんぶんごまとかさ。あとは、そうね...、つまりぶんぶんごまの話だよ。

なんだか突然できるようになっちゃって、なんでこんなことが今までできなかったのか不思議に思うこともあるじゃない。例えば、ぶんぶんごまとかさ。あとは、そうね...、つまりぶんぶんごまの話だよ。

おまえは俺の目の前で、紐に通された駒をぶんぶん廻す。

どうだ、面白いか？

意外に面白いな。

おまえは両端の輪に指を通して、そいつをぶんぶん回しながら一方の手を持ち上げる。駒はばたばたと暴れながら回転を緩め、俺はおまえの失敗を確信する。そして、上下に紐を引けば、案の定、思惑通りにはいかず、ばたばた暴れた駒が回転を止めた。

引いて廻す以外に技はないのか？

引いて廻すだけだ。

そうか。俺はこいつを引きながら雲丹を思った。

ウニ？

ある時、突然、美味しいと思えるようになったんだ。

そうか。じゃ、回転寿司でも行くか。

いいね。

いいよな。大人って、いいよな。

集団的だわね

俺はベッドの中で、湿った身体を巻き付ける彼女の髪を撫でていた。
「明日からホルムズ海峡の機雷掃海だ」
「来月には帰るのよね？」
「そのつもり」
パスポートだけは、眠る前にもう一度確認したほうがいいだろうか？ しかし、気怠い身体を起こすのが億劫でならない。
「キラソーカイって何するの？ 危なくないの？」
「海底の地雷処理だよ。船で掃海具を引き吊り回して、遠くから爆破させるだけだ。意外と何ともなく終わるんじゃない？」
作業自体はマニュアル通りにこなせばいい。いつまでたっても英語が身に付かない俺は、その後に繰り広げられるであろうパーティーのほうが、よっぽど億劫だった。
「それにしても、うちの会社って何でもやるわよね」
「コンプラ違反じゃなきゃ、金になりそうなことは何でもやるからな。法律が変われば真っ先に首を突っ込むさ」
「社則は法に触れないように、一回りも二回りも締め付けがきびしいってきくけど？」
「解釈、解釈」
俺は枕元の灯りを消して、彼女の額に口づける。
「あぁらホントにいい、現代的だわね♪」
不意に思い出した歌が口をついた。自分が生まれるよりも前の古くさい歌が好きだ。

「何なのその歌？」

誰だったけな？

翌朝、俺は忌々しい目覚まし時計をひっぱたいて、ベッドを抜け出す。そして、彼女が目覚めるより先に家を出た。

オマーンの手は本当に素晴らしかった。ビーチではしゃぐ歳ではないが、オフの日になれば、海辺を歩いて優雅に泳ぐウミガメを探した。

彼女は枕に肘を付いたまま、俺のスマホを眺めて微笑んだ。爬虫類など興味のない女でも、青い海を優雅に泳ぐウミガメには目を細める。

「無事に帰ってきてよかったわ。ご飯とかも美味しかったの？」

俺は頭の下に自分の両手を敷いて、天井を眺めている。

「どうも、外国の飯は口に合わない」

「帰ってくるなり大戸屋だったもんね」

俺は英語が飛び交うパーティー会場で、日本語しか喋れない連中で固まって、黙々と飯を口に運んでいた惨めな時間を思い返し、溜め息をついた。

「そう言えば、なんか手紙が来てたわよ」

彼女は裸のままで立ち上がり、カウンターキッチンに置かれた封筒を手にとった。俺に差し出されたそれは、真っ白な窓付き封筒から赤い紙が覗いていた。日本の国旗でも象ったような手紙にゾッとした。

国務大臣は、憲法一三条と一八条から徴兵制は許容されないとの政府の立場を堅持していた。それでいて、国を守る事を苦役と考えるのは国家の名に値しないと発言し、ナチスを作らないために徴兵制を維持するというドイツの考え方を持ち出した。

「軍隊は軍人である前に市民であらねばならない」

なるほど。しかし、この国でその例を持ち出す意味は何なのか？

俺は布団を被ったまま、恐る恐るその手紙に手を伸ばす。

「召集令状だったりして」

無理に作った笑顔がひきつる。

「赤紙ってやつ？」

彼女の笑顔もひきつる。

「でも、戦争なんてはじまってないよな？」

「でも、あの同盟国って、戦争中なんて関係なく空爆とかするじゃない」

俺の頭にまた古臭い歌が流れた。

「あぁらホントにいい、現代的だわね♪」

嗚呼ベイベ

「私、塩豆大福にだけは裏切られたこと無いわ」

要するに、俺に裏切られたと言いたいのだろう。おまえは冷たく言い放ちながらも、未だ俺を裏切らない。無理に千切った歪な和菓子を俺に差し出す。

「嗚呼ベイべちゃん、塩豆大福のいいところを三つ上げなさい」

俺はそいつをかじって一言。

「甘過ぎず、それでいて、程良い塩味が品のいい甘みを引き立てる」

二口かじって、もう一言。

「餅のモチモチ感の中にエッチの効いた豆のホクホク感」

残りを口に放り込んで適度に咀嚼。そして、茶も含まずに一気に飲み下す。

「でも、やっぱり豆大福は喉越しだよな」

「大変よくできました」

おまえは子供でもみるような目で微笑み、塩豆大福をそっとかじる。

「なかなかてひないはお」

俺が茶を継ぎ足せば、おまえは湯呑みを唇に当ててZZZ。

「なかなかできないわよ」

「なにが？」

「塩豆大福のいいところを、いきなり三つも言い当てるなんて」

言い当てたのか？

「心が豊かなのね」

俺は嫌な予感がする。

「それなのに」

案の定、おまえの目には突如として怒りが宿る。

「なんで私を笑い物にした？」

「そんなつもりはない」

「嗚呼ベイベちゃん、ここを見て。傷ついた私の心がここにある」

おまえは随分と男らしい拳で胸を打つ。そして、俺に問うた。

「一〇〇人の笑顔を見るために、大切な一人を傷つけていいのか？」

「いいわけがない」

「嘘を言うな。一〇〇人の阿呆から賞賛されるためなら大切な一人だって殺せる。それがきっと嗚呼ベイベちゃんの考え方なんだ。それならそうとってくれよ。そうでないと何かしっくりこないのよ。ねえ、本当は誰のことが大事なの？ ねえ、一体何に気を使っているの？」

おまえは本当に不思議そうな顔で俺を見た。俺は面倒な気分になって黙り込む。怒りが過ぎ去るのを待つ。優しいおまえが良いように解釈しはじめるのを待つ。

「ねえ、嗚呼ベイベちゃん。私を笑い物にしたかったらそう言って。それがみんなの幸せなんだって」

俺の胸が高鳴る。

「ねえ、嗚呼ベイベちゃん。あなたの犯した過ちは、きっと大したことじゃないの。誰でもやりそうなつまらないこと。でも、それじゃ、私が惨めじゃない。あなたと一緒にいる私がつまらないじゃない」

俺はおまえの手に握られた残り一口の大福を見つめ、最後にもう一口いただきたいものだと思った。

タレを買いに

女は暑苦しいアパートで頬杖をつきながら撮りためたドラマを眺めている。俺はその姿を横目に、長財布をポケットに押し込んで、本屋に涼みにでも行こうと企む。

「どっか行くの？」

一緒に行くと言われるのが面倒で、俺は曖昧に首を振る。

「暑いわね。かき氷でも食べたいわ。どっか行くなら、何でもいいから、あれ買ってきてよ」

「あれってなんだ？」

「かき氷にかけるタレよ」

「タレ？ ブルーハワイとかのあれか？」

「そうそう。ブルーハワイはやめてね。日焼け止めみたいな味がするから」

「飲んだことないけどな」

女の眉間に皺が刻まれる。

「暑いんだからつまらないこと言わないで頂戴。言いたいことは分かるでしょう」

白砂の付着した白い肌から漂う甘い芳香を思う。扇風機がすす黴の胞子を巻き上げるボロアパートで食べたい味ではない。餓鬼の頃なら迷わずメロン味。しかし、いつの間にやらみぞれ味。そいつに小豆が盛られ、抹茶パウダーが振りかけてあれば言うことない。庫内で痩せた氷は、冷凍食品の匂いをたらふく吸い込んでいる。ここは氷も買うべきであろう。

健康情報誌の「腹割」特集でも立ち読みしようかと考えていたが、理想のかき氷にはたっぷり煉乳までもが盛られている。腹割は来年に持ち越しだ。俺は暑苦しいボロアパートで仁王立ち。鼻息を荒らげて、胞子を巻き上げる。そして、メッシュスニーカーに履き替えて女に告げた。

「最高のタレを買ってくるぞ」

「私のチャリ使う？」

俺は眉間に皺を寄せて首を振る。どうにも電動自転車というものが性に合わない。漕ぐ気があるなら全力出せよ。ガッチャマンからはじまった俺のチャリンコ人生で、あいつだけは受け入れ難い。

「なんでもいいから早く買ってきね。あ、あと氷も」

言われなくとも分かっておる。あいつはいちいちこっちのやる気に水を差す。俺は不機嫌に鉄階段を踏み鳴らし、その下で錆にまみれた自転車に鍵を差す。ガチャガチャと何度か力を込めねば開きやしない。

そうだ。潤滑油が必要だ。

錆び付いたものたちをピッカピカに磨き上げて、油をささねばなるまい。そして、鈍い金属音とともに鍵が開く。タレを買いに行こうしているスーパーには、日用品も置かれていたはずだ。俺はチャリンコに跨がってペダルを軋ませる。そして、行きはヨイヨイ、坂道をスイスイ下って行った。とはいえ暑い。直射日光にアスファルトの放射熱。まったく暑い。いくら首を振っても逃れきれない灼熱をなんとか振り切らんと、俺はチャリンコを加速させた。

スーパーに逃げ込み冷風で身体を冷ます。しばらく放心していると、氷旗が吊された商品棚が目にとまった。そこには色とりどりのタレが並んでいる。俺は迷わずみぞれの瓶に手を伸ばした。そして、首を回し、辺りに小豆缶が無いことを確かめて、鼻を鳴らす。まったく詰めが甘いね。小豆色した缶詰めを思い浮かべれば、家にストックがあったような気もする。汁粉が食いたいと思い立った冬の日、買った方がいいが餅がないことに気づいて食わなかったのだ。数日前のこのように覚えているが、季節は一変している。

不意に不安が過ぎった。冬には汁粉、夏にはかき氷。やるべきことは山ほどあるのに時間だけが流れ去る。俺はみぞれの瓶を右手に握り、二階の日用品売り場へと駆け上がった。そして、左手に呉五五六の二〇パーセント増量缶を握った。

やると決めた、今、やるのだ。

「あ、袋いいです」

会計を済ませたタレと潤滑油を両手に店を出た。タレを前籠に置き、早速スプレー缶にノズルを差し込む。そして、鍵穴へシュッと一吹き。するとどうだ。毎度、ガチャガチャとねじ切らんばかりに力を込めていた鍵がスルリと開いた。

「えええっ」

思わず声が漏れる。大胆に肩が書き込まれたマダムと目が合い、軽く頭を垂れてからチャリンコを発車させた。鍵穴に差しただけの油だが、心なしかペダルも軽い。俺は坂道をギョングンと上り、アパートへ戻っていった。

少し考えれば阿呆でも分かる。ペダルが軽くなるはずがない。俺は疲労の溜まった脚を引きずり、滝のような汗を流しながらでアパートの戸を引いた。ドラマを見終えた女が欠伸をしながらタレを出迎える。すっかり茹で上がった俺を見て目を丸めた。

「暑いのに無駄な苦労が好きね」

「無駄な苦労など好かん。実に有意義な苦労であった」

俺はタレを差し出しながら、印籠のように呉五五六を掲げる。女はタレを受け取り、阿呆のように口を半開きにした。

「確かになんでもいいって言ったけど、みぞれなの？ かき氷って色を楽しむものじゃない？ 人工着色料を善とする数少ない食べ物じゃない？」

「正月に買った小豆缶があったろう」

「この前、トーストにのせて食べたじゃない。名古屋人に教わったとかなんとか」

嗚呼。

「ところで氷はどうしたの？」

「嗚呼っ」

俺は危うく印籠を落としそうになる。

「なによそれ？」

「呉五五六だ」

「そうみたいね。で、なにをするの？」

「そりゃあ、『サビを取り、キシミをおさえ、動きをよくする』のさ」

俺は缶に書かれたコピーをそのまま読み上げる。女は首を傾げて目を細めた。

「シュッと一吹きで、錆び付いた鍵もシュッコンシュッコン動くようになったぞ。こんなにすぐに効果が実感できるなんてなかなか無いぞ。おいつ、使い古しの歯ブラシを持ってきてくれ。これから俺の自転車を磨き上げる。サビを取り、キシミをおさえ、動きをよくするのさ。氷を買いに行くのはそれからだっ」

息巻く俺から視線を逸らし、女は手にとったタレに目を落とす。そして、首を倒したまま再び俺を見る。

「それって時間かかる？」

俺は小さく首を振る。

「じゃ、済んだらメロンシロップも買ってきて頂戴」

俺は小さく頷く。

「かき氷のタレって基本的にはどれも同じで、香料と染料でイチゴだのメロンだのと言っているらしいぞ」

無駄な知識を披露すれば、女は更に目を細めた。

「なにそれ、名古屋人に聞いたの？」

なにより、サビを取り、キシミをおさえ、動きをよくすることが先決だ。

樵

「嗚呼、疲れたわね。田舎暮らしして樵にでもなりたいわ」

俺の失態で頭を下げるために同行してくれた女上司が漏らした。

「きこり？ ですか？」

「理想よね」

「樵って」

俺の頭に浮かんでいるのは、かつてブルボンが販売していた「きこりの切り株」というチョコレート菓子のパッケージに描かれていた、あのラウンド髭のオヤジ。

「なによ」

俺はスマホを取り出して、国語辞典で調べてみる。

「山林の立ち木を伐(キ)り倒す職業(の人)」

「は？」

「樵ですよ」

女上司は通りにタクシーを見つけると、大きく身を乗り出して手をふった。年の割にスレンダーな体型を保っている。俺はそのピンと伸びた身体に見惚れ、樵の既成概念が吹き飛んだ。

タクシーが停まると、俺は先に乗り込む。通常は上司を先に押し込むもんだが、以前、先に乗るように促したところ、奥まで乗り込むのが面倒だからと、先に乗るよう命じられたのだ。

「で、なんの人だっけ？」

「はい？」

「樵よ」

「あ、はいはい」俺はスマホを取り出して改めて答える。「山林の立ち木を伐(キ)り倒す職業(の人)、です」

「伐り倒すことが仕事なのね。で、売るの？」

「知らないっすけど、間伐のために伐採したりもするんじゃないですかね」

「あんた、詳しいじゃない」

「知らないっすけど、一度ニンゲンの手が加わった人工林って、世話し続けないと痩せてっちゃうらいしですからね」

「詳しいじゃない。あんた、樵になれば？」

「クビですか？」

女上司は顔をクシャクシャにして笑い、「そんなことはない」と、皺だらけの顔の前で手のひらを振った。

「でも、田舎暮らしって憧れますよね。樵かあ」

「バーニーズ・マウンテン・ドッグを二匹くらい飼ってね」

「バーニーズ？」

「大きな犬よ。毛がフサフサのね」

俺は毛がフサフサの大型犬を連れて斧を担ぐ女上司を想像する。そして、苦笑いを浮かべながらある疑問にぶち当たった。

「斧ってどこで買えるんでしょう？」

「さあ、ハンズじゃ見ないわね」

「ジョイフル本田とか？」

「あんた茨城？」

「千葉です」

やがて、タクシーは駅のロータリーに到着した。女上司はカードを差し出し、「お世話さま」と営業スマイルを浮かべた。

タクシーを降ると、俺は女上司と二人きりで多少緊張していたことに気づく。凝り固まった身体を伸ばし、嗚呼と溜め息をもらした。

「あんたとこんなに樵の話をするとは思わなかったわ」

「俺もです」

「なんだかスッキリしちゃった」と少女のような笑みを浮かべた。

「またなんかあったら、今度は海人の話でもしましょう」

「あんたがトラブルおこしたんでしょう」女上司の眉間に皺が寄る。

「そうでした」と頭を下げれば、「気をつけなさいよ」と言い残して、俺に背を向けて歩きだした。

「お疲れさまでした」俺はもう一度、深々と頭を下げた。

そんな女上司が会社を辞めることになった。俺はすぐにあの日のことを思い返す。しかし、おそらく競合会社でいいポジションの話でもあったのだろう。

小さな営業所だ。送別会の席では、最後の有り難い御言葉を頂戴する前に、一人ずつ感謝の言葉を述べることになる。俺はその際に樵になるのか聞いてみたいとも思うのだが、おそらく無難な謝辞に終わるだろう。

自転車に乗って

女房の真っ赤な自転車を借りてこの坂道だらけの街を走る。そして、正面からやって来る鏡に映った俺のような男とハイタッチ。瞬時に俺と男の間ではこんな会話が交わされる。

「お宅もその口？」

「そういうお宅も？」

「ええ、どうも電動アシスト自転車の購入を躊躇ってね。俺は普通の自転車でいいなんてね」

「そうそう。で、結局一人で出かけるときは、女房のこいつを借りたりしてね。乗ってみると便利なもんだ」

俺たちがまだ珍毛を生やしたばかりの頃、こいつはオバハンのために誕生した乗り物であった。もう十分にオジハンになったのだから躊躇わずに夫婦で購入すればよかった。しかし、エブリデイ・ロー・プライスなプライドがそれを阻む。

自転車はそのヒトの生活が窺い知れる。男の荷台にはまだチャイルドシートが載せてあった。

「まだまだ可愛い盛りだね」

「そちらお子さんは？」

「もう小学校だからね」

うちの自転車は既にチャイルドシートが取り外され、今では前後に籠が取り付けられている。

上り坂に差し掛かり、俺はギアを一段落とす。立ち上がりずともスイスイと坂を登れ

るのだからその自由度に驚かされる。

まだ珍毛も生えていない頃、五段変速ギアの付いた自転車を強請った。サドルからハンドルのところまっすぐ伸びるトップフレームにシフトレバーが付いたやつだ。当時の餓鬼には憧れの一台。角ばった二つ目のランプが付いていてね。荷台の側面に折りたたみ式の籠が付いていてね。よくチェーンが外れて指を油まみれにしたもんだ。

坂を下った先に交差点が現れた。ちょうど俺と並走して左折しようとしてくるベントがいる。俺はあえて速度を落として、悠々と横断歩道を渡る。ベントは三方に光を放つスリー・ポインテッド・スターの紋所を俺に差し向けて停車する。陸・空・海のすべてを制覇するという願いが込められているそうだが、狭い島国で最強の乗り物と言えこの電動アシスト自転車なのではないだろうかと思う。

俺は気分がよくなって、ちょっとファンキーはフォークソングを口ずさむ。

「自転車に乗って♪自転車あに乗って♪どおこおかあ遠おくへ...♪」

いや、違う。

「自転車に乗って♪自転車あに乗って♪ちよいとそこおまあでえ...♪」

ちよいとそこまで、なんだったっけな？

オマージュ

ついに未来はやってきた。未曾有の震災、未曾有の法案に打ちのめされ、それでも未来はやってきた。八〇年代が描いた華やかなものには程遠いけれど、ついに未来はやってきた。レトロフューチャーと言うのかしら。昔に描かれた未来が好き。〇〇年以降に描かれた未来はややこしくていけない。未来はやっぱり二一世紀よね。未来は今。テレビは腕時計で見えるようになるかと思っていたけれど、一時テレビは電話で見えるようになり、今ではテレビの存続意義すら危うい。乗り物は地面からちょっとだけ浮いているはずだったけど、昨日、電動アシスト自転車がパンクした。だから俺は軟弱な二本の脚で歩こう。シリーズ三作目で、エメット・ブラウン博士は西部開拓時代のフロンティアで未来を語った。未来には車というものがある。それでもヒトは歩くのだ。レクリエーションのためにね。俺はお気に入りのTシャツを羽織る。前に大きくフラックス・キャパシターが描かれた水色のTシャツ。フラックス・キャパシターを知っているか？博士がトイレで滑って転び、便器で頭を打った時に思いついた時限転移装置だ。時速八八マイルを超えた瞬間、俺は時間を超えるぜ。さあ無断欠勤だ。Tシャツ一枚でちょっと肌寒いけれど、スニーカーを履いて職場とは反対方向へ歩き出すぜ。八八マイルとはおおそ一四〇キロメートル。一時間で一四〇キロメートル走るスピードとはどのようなものか。

人類最速ウサイン・ボルトで一〇〇メートルが九秒五八。時速で言えばたったの三七、五七八二八八・・・キロメートルだって。ボルトが時限転移装置を背負ったところで時間を超えることはできない。だから物語は走る。もの凄い勢いであらぬ方向へと走りだす。俺はこのアップダウンの激しい横浜の地で朝から夜まで縦横無尽。高濃度茶カテキンを吞んで無駄な肉を燃やす。肉の七〇パーセントを足とする。走るという行為はジャンプの連続だそう。ボールが弾むように、かつ、空気を切り裂く新幹線のように。俺は筋張った鈍器のような脚で正確に弾む。グレープフルーツにまで退化した頭を下げ、ティラノザウルスのように頼りない両手を懸命に振る。それでも、ニンゲンの脚が単位時間あたりに回転できる数というのは限界があるんだって。だから、アフリカンや欧米人に比べ脚の短いモンゴロイドはどうしても不利なんだって。「へえ」そいつは面白いことを聞いたと思ったら最後、もうそのルールだけは絶対。俺はキャラクターとして成り立つ範囲で極限まで体を鍛え上げる。このアップダウンの激しい横浜の地で夜から朝まで縦横無尽。そして、遂には首から下は全て脚。頼りない両手は耳のあたりから生えている。そして、坂道を駆け上がる。太陽を見上げ、そのまま天まで駆け上がらんばかりに脚を回す。やがて坂を登りきったところで一気に駆け下りる。いける。このまま俺は時速八八マイルに突入する。光につつまれて時間を超えれば昨日見た朝。二〇一五年一〇月二日に戻ってきたみたい。ついに未来はやってきた。

コンチクショークソクライダー

黄昏時、俺は小学生時代を過ごした学び舎へ自転車を漕いで行く。電信柱の脇にそいつを乗り捨て、在校時から低すぎて危険だと言われ続けている正門を楽々乗り越えた。そして、誰もいないグラウンドを縦横無尽に駆け回る。もつれる足を懸命に堪えてその中心で立ち止まった。

夜空を見上げて息を整える。深呼吸に続いて籠を外す。

「コンチクショークソクライダー」

三度叫んで変身ポーズ。そして、低空飛行のライダーキックを放った。肩を揺らして校舎に向き合えば、真っ暗な窓を並べるひび割れのビルディング。日暮れ過ぎの校舎には決まって魑魅魍魎が潜む。窓の奥に目を細めれば、頭を廻る不気味なメロディー。

不思議思い議 摩っ訶不思議 ルーワ♪

仮面ライダーでおなじみ秘密結社ショッカーのテーマではない。宇宙刑事シャイダーが地球を守るべく戦い続けた不思議界フーマのテーマ＜不思議ソング＞だ。同年代の男であれば不安な思いに駆られた時に何処からともなく流れ出すナンバー。そして、フー

マ戦闘員ミラクラの醜い容姿に関して言えば、ショッカー戦闘員など比ではない。トラウマと言うには胸が熱い。

音楽に合わせて窓の向こうに蠢く無数のミラクラ。俺はグラウンドの真ん中で、拳を突出し、飛び蹴りを繰出し、そして、相手の攻撃を側転でかわす。殴る、蹴る、側転をひたすらに繰り返す、やがて太陽がすっかり沈んだ頃、俺は満身創痍でグラウンドに倒れ込んだ。

空にはデカイ月。上半分がすっかり欠けて、ちょうどドンブリのように見える。こんな風に月が見えることもあるのか。俺は親指と人差し指で輪を作り、ドンブリをその中に収めた。冷えた校庭の砂利が背中を刺す。輪に収めたドンブリをゆっくり口元へ運び、音を立てて啜る。いくらか満たされ、ゆっくりと立ち上がった。

正門を乗り越えて自転車のもとへ向かえば、それは電信柱の防犯灯に照らされていた。その姿に違和感を覚える。こんな自転車だったろうか。考えてみれば自分の自転車を正面から見る機会は少ない。倒され錆びついた自転車が不意に愛おしく思え、膝をついて手を差し伸べる。そして、反対の手をチノパンのポケットに突っ込んだ。

鍵がない。

ベストには無数のポケット。いい歳になれば親父ファッションの良さを知る。釣りの趣味があるわけではないがフィッシングベストを着ていた。ポケットは多ければ多いほどいい。長財布がスッポリ収まる内ポケットがあれば申し分ない。しかし、あるべきところにあるべきものがないと気付いた時、酷いパニックに陥る。俺は錆びついた自転車の傍らに跪き、防犯灯のスポットライトを浴びながら打楽器と化す。新手のパフォーマンスのごとく全身を叩き回せば、脳裏には再び＜不思議ソング＞が廻り出した。そして、背後にミラクラの気配が迫る。俺は立ち上がり、再び、殴る、蹴る、側転を繰り返す。鍵が差しっ放しであることに気付くまで暫く。

サンタクロースイズ...

「来栖さん、随分痩せたんじゃない？　なんか食べれば？」

俺はカウンターでグラスを揺らしながら小さく首を振る。

「いくらママの飯だって、なんだか喉を通らんよ」

若いのが声を上げて、萎びた輩は無視を決め込んだ。そして、顔のない馬鹿どもがいい気分になって文字を垂れ流し続けている。

確かに随分と痩せた。伸ばし続けたこの髭を剃り落としたら、誰も俺のことをサンタクロースとは思わないだろう。

「世界が見えちゃうって大変ね」

三人の娘を嫁がせることになった貧しい一家、それを見兼ねた聖ニコラウス（蘭語読みでシンタクラス）は暖炉に下げられていた靴下にそっと金貨を忍ばせた。その精神だけは無くすわけにいかない。そして、我々一族に備わった唯一の能力、何処の誰が何を欲しているか、Google Map にフラグが立つように一望できてしまう。

あの小僧は「もうブームも下火じゃない？」なんてママに言われようと、妖怪ウォッチUが欲しい。

あの娘は暖かい毛布も欲しいけれど、なによりパパの無事を願っている。

あの刈り上げ坊ちゃんは、水爆を積んだロケットが欲しくてたまらない。

パパは帰してあげられないけれど、玩具や毛布やロケットくらいなら届けてあげられる。

「偽善と言われ、自己満足と言われ、悩んだ時もあった」

「言わせておけばいいじゃない。あなたの才能に嫉妬しているだけ」

「大したことじゃない。俺にはあんなことしかできない」

「できることをやるしかないじゃない。私なんてこんなことしかできない」ママはそう言って、しじみ汁を差し出した。「スープくらいは飲める？」

俺は有り難くてうまく微笑むことができない。そして、そいつを一気に飲み干した。

「これは私からのプレゼントね」

「それなら、蛭までしっかり食べんといかん」

俺は箸を立て、小さな身を摘まみ上げては口に運んだ。幾らか身体が温まり、ようやく重い腰をあげる。

「はい、じゃあママへのプレゼントは」

俺はそう言って財布を開いた。ママは愚痴の少ないリピーターが置いていく代金を何より好む。俺は愚痴はこぼすけれど。

「随分呑んだみたいだけど大丈夫？」

「大丈夫。俺は櫓に乗るだけ。走るのは赤っ鼻のあいつらだから」

俺はそう言って、真っ赤なコートを手に取った。

真っ赤お鼻の...

俺は真っ赤なコートを羽織って店を出た。駐車場に回ると、櫓につながれたルドルフは車止めに張りついた苔を食んでいる。

「待たせたね。行こうか、ルドルフ」

「長かったじゃねえか」

「ごめん。暇だったろ」

「お陰で苔の食い過ぎだ。腹ごなしにひとつ走りしたいね。さっさと乗れよ」

俺は櫓に腰をおろして手綱を握る。途端、ルドルフはアスファルトを蹴り上げ、櫓は空高く舞い上がった。酒で火照った頬を冷まししながら夜空を切り裂く。見上げれば、濁った空気の中へと懸命に光を届ける星々。大犬、子犬、オリオン座。俺は冬の大三角を繋いで雄叫びをあげる。

「メリークリスマスううう」

ルドルフは醒めた目で俺に振り向いた。

「さっきから気になってたんだけどよ。そのコート、去年クリーニング出したのか？ なんか薄汚えぞ」

「洗濯機にはかけたけど」

「仕事着くらいちゃんとクリーニングに出しなよ」

「どうせ誰にも見られずプレゼントを配るんだ。どんな恰好だっていいだろう。まったく、いつまでこんなかとするんだかね」

「嫌なら辞めちまえよ」

「友達甲斐のない奴だな。一緒に頑張ろうとかなないのかよ」

「止めて欲しかったのか？ 己のない野郎だ」

俺は言い返す言葉もなく手綱を打つ。ルドルフは「痛えな」と漏らし、速度をあげた。

DSのソフト、妖怪ウォッチU、iPadにドローン。俺はそいつらを枕元に置いては直ぐに煙突を抜けた。中には『星の王子様』が欲しいなんて小僧もいる。

「よくできた刷り込みだねえ。ママに気に入られたくてそんなこと思い込んでんだろ。本当は何が欲しいんだ？」

ルドルフは意地の悪いことを呟く。それでも俺は構わず一冊の本を手で煙突へ飛び込んだ。いちいちそんな事情まで構ってられるか。

櫓に戻るとルドルフはなにやら呪文のように呟いた。

「L'essentiel est invisible pour les yeux.」

「なんだって？」

「内藤濯に言わせると、『かんじんなことは、目に見えない』だ」

「ああ、例のキツネの台詞ね」

「L'essentiel ってのは Anything essential だぞ。ありや、ものを与える俺たちへの挑戦状だ。肝心なものが目に見えないだと？ 玩具を貰った小僧たちの顔を見ても。馬鹿言っちゃいけねえよ」

「おまえって、揺るぎないよな」

「しっかりしろよ来栖。ものを与えるのが俺たちのアイデンティティなんだぞ。見えないもんがいいなんて、鼻糞より鼻息のほうが Essential だって言ってるに過ぎんっ」

「そう、なのか？」

「ひどい輩は『いちばん大切なものは目に見えない』なんて抜かしやがる。一番ってことは無えだろ。来栖にとって一番なものってなんだよ？」 考える間もなくルドルフは続け

た「オ・レ・だ・ろ。馬鹿みたいな鼻したこの俺が見えないか？ 見えるよな？」

俺は次第に何を悩んでいるのか分からなくなってきた。そもそも悩みなどあったのか？ ものを求める小僧がいるから俺は届ける。まだまだ沢山の小僧がものを夢見て健やかな寝息をたてている。中には妙ちきりんな奴もいる。俺はかりあげ小僧を思い浮かべて少し嫌な気分になった。

「水爆を積んだロケットが欲しいなんて坊ちゃんもいるけど？」

間髪入れずにルドルフは応える。

「撃ち込んでやれ」

俺は乾いた笑いを夜空に響かせると、直ぐに口を結んで、少しきつめに手綱を打ちつけた。

「痛えなっ」

「そういう品のない冗談は嫌いだよ」

「俺は陰気くさいサンタクロースのほうが嫌だけどね。今日は誰もがおまえからプレゼントを受け取れる有り難い日なんだ。もっと楽しくやれよ」

ルドルフは夜空を蹴散らしてグングン加速した。

肉とマシン

人類が永遠の若さを手に入れて久しい。シマジは四〇を迎えた誕生日、ついに全ての臓器をリニューアルした。自宅に置かれたディープフリーザーには、自身の各種幹細胞がストックされており、痛んだ臓器はいくらでも再生させることができた。脳味噌だって勿論。金があればいくらだって長生きすることができる。いくらだって生き生きと暮らしていける。スタイルが良くなければ身につけることのできない最新ファッションだって、いつまでも楽しむことができた。老いるなんて貧乏人のすることだ。

シマジはベルボトムのパンツにタイトなシャツを羽織って、自分が生まれるよりも遙か昔のヒッピーファッションに身を包む。そして、鏡に映る自分を舐めるように眺めていた。

「ハッピーバースデー、トゥ、ミィ♪」

社会の仕組みも大きく変わった。金さえあればいくらでも働いていられる。そして、働いている限りはもちろん金が入る。年金なんてものはとうに廃止された。老いて働けなくなるなんて自己管理の問題であり、そんな怠慢をこの国は許さない。いつの世も貧乏人は生きにくい。収入格差が肉体的な格差を生んでしまうのだから、その差は目に余る。そして、金持ちはいつまでも若さを保ち、出来の悪い貧乏人だけが早死にした。一体何

と競っているのか知れないが、自由競争社会にとって実に好都合な悪循環だ。

本日一三時より、アスナロ公園にて飛行実験を執り行う。世紀の瞬間を見逃すな。

幼なじみのホン太からメッセージを受け取った時、シマジはまた面倒な誘いが来たもんだと顔をしかめた。それでも、遅い朝飯を済ませた後、どんな格好で出かけようかと鏡に向き合っている。ホン太の飛行実験に備えて着飾ろうというわけではない。シマジは自分が呼ばれた以上、必ずクミコにも声がかかっているはずと踏んでいた。

シマジのような、ストックした幹細胞を自家移植することで再生される肉体はソフトウェアと呼ばれた。このような生物学的な手法に対して、最近ではハードウェアに着替える工学的な手法を好む者も多い。超人的な力への憧れ。多くはS F的な夢を追いかけた男どもだ。

ホン太は肉体の八割をハードウェアに置き換え、いつか自在に空を舞う日を夢に見た。そして、ようやくその第一歩（一っ飛び？）を踏み出そうというのだ。いずれサイエンスフィクションという言葉も聞かれなくなるだろう。

ホン太はヘルタースケルターやらボルダリングウォールやらが並ぶカラフルな公園で、ジャングルジムに寄りかかっていた。そして、シマジの到着に気づくと、手首に埋め込まれた端末で時間を確認した。

「さてと、タイムハズカムだ」

シマジは会う度に巨大化していくホン太を見つめながら苦笑いを浮かべた。続いて、辺りを見回す。クミコにはメッセージが届いていないのだろうか。三人は小さな頃から多くの時間をこの公園で過ごしてきた。ガキの頃からの足りない脳味噌はいつまで経っても大して成長しない。しかし、その外見は大きく変貌を遂げた。

「これから飛行実験を行う。おまえの誕生日記念だ」

「そりゃ、どうも」

シマジは苦笑いのまま腕を組んで頷いた。すると、ホン太は両手両足に加え、背中から伸びる四本の筋電義肢を広げた。

「おまえは蜘蛛か？」

「なにか文句あるか？」

ホン太はジャングルジムに向き合ったかと思えば、八本の手足を駆使しながら巨大な蜘蛛となって、あっという間にそれを登ってみせた。続いて、四本の義肢を二枚の翼に変形させる。苦笑いのシマジもその滑らかな動きには感心し、口を尖らせながら艶やかな前髪を掻き上げた。

「大したもんだな」

感心する一方、何故そんなに肉体を削ぎ落として機械化を進めるのか理解しかねる。シマジは唇を折り込んで、成り行きを見守った。すると、ホン太はしゃがみ込んでジャングルジムを両手で掴む。続いて、主翼の上面に配置された低騒音エンジンを回しはじめた。

低騒音とは言え、間近で唸るエンジン音には耳を塞ぎたくなる。その中に「キャッ」と、か細い声が響いた。シマジは反射的に振り返る。そこには薄化粧のクミコが、騒音

に顰めた顔を皺だらけにしていた。

「おお、クミコも間に合ったか」

ホン太が満面の笑みを浮かべれば、クミコはそれを見上げて眉を垂らした。への字に結んだ口元からはほうれい線が伸びていた。

ホン太はジャングルジムの天辺で四つん這いになりながら、胸を反らせて空を見上げる。さらにエンジンを唸らせて、飛ばされそうになる身体を必死にジャングルジムに引き寄せた。次の瞬間、両手を離して伸び上がる。土煙を巻き上げながらジャングルジムの力強く蹴った。

「ヒャッハウ」

喉から出たものか定かではないが、雄叫びのようなものを発しながらホン太の身体が浮き上がった。そして、大空へ舞い上がる。

と、思いきや、重たいボディは直ぐに失速。ホン太は空中で翼を筋電義肢に戻すなり、数メートル先のボルダリングウォールに張り付いた。

エンジンが鳴り止むと、辺りはクミコの笑い声に包まれた。

「笑うな、笑うな」

ホン太は壁に張り付いたまま、首を一八〇度後ろへ回す。

「派手な音を立てた割にはからっきしじゃない」

「馬鹿言うな。おまえら自力でジャングルジムからこの壁まで飛べるか？」

「確かに飛べないわね。その必要もないけど」

「そうやって、いつもおまえは批判ばかり言う」

「いやなら、飛行実験だなんて連絡しなければいいじゃない」

「おまえが死ぬ前にスゲーって言わせるのが、俺の目標なんだよ」

「ヒトを婆さんみたいに言わないでちょうだい」

そこで、シマジは口を挟む。

「でも、ちょっと傷んできたんじゃないか？」

「いつまでも艶々な、あんたがおかしいの」

「誰だってやってることさ。なんでクミコはそこまでソフトウェアを拒む？ そろそろ手を付けないと、細胞が正着しなくなるぞ。そもそも自分の幹細胞は蓄えてんのか？ 金がない訳じゃないんだろう？ 気づいたら手遅れなんてなりかねないぞ」

「あんたは説教が好きね」

「老いていくおまえが見てられない」

クミコは眉を顰める。

「あんたたちが異常なの」

「自分の意志とは無関係に死が迫ってくるなんて酷い人生だと思わないか？」

「それが自然の摂理なの」

「そんなものは過去の話だ。生命は進化するんだよ。死期なんてものは自分で選べばいい」

「私、自分じゃ死ねない」

「家族に自死保険も残せるぞ」

シマジが嫌らしい笑みを浮かべると、クミコは鼻を鳴らした。

「あんた実は私に営業しているんじゃないの？」

シマジは保険会社で営業マンをしていた。人口増加に歯止めがかからず、国が早期自殺を奨励するようになると、直ぐに新しい商品が出回るようになった。老衰や不慮の死では適応されないが、自殺にのみ適応される生命保険だ。もちろん死ぬ予定のないうちに加入することが条件であり、簡単なテストで精神が病んでいないことを証明する必要がある。

「結婚して子供がいる訳でもないし、そんなもの必要ないない」

「そうか。それは残念だ」

「随分と命を軽々しく扱えるようになったもんね」

ホン太はボルダリングウォールを下りると、四本の義肢を折り畳ながら俺たちの方へ歩み寄る。そして、ハードウェアをヒト並みの体型にまで縮めて立ち止まった。

「クミコはいつもネガティブなんだよ」

「そう？」

「俺たちは肉体をこんなにしてまで寿命に抗ってんだぞ。命を粗末にしているのは自分じゃないのか？」

シマジはホン太の意見に大きく頷いた。

ホン太のようにハードウェアへの移行が進んだ奴らの間では、火星移住なんて話題すら持ち上がっている。人口増加で地球が窮屈だというならば外に出ればいい。それをポジティブと言うべきか少々疑問も残るが、ホン太は自力で火星まで飛んでいくことを理想として、飛行機能を身に付けた。そして、自力で大気圏を突き抜けるためには、やはり完全なるハード化が望ましい。

「じゃあ、命じゃなくて肉体を粗末にしているのね」

「肉体なんてものになんの意味がある？ こんなに肉を削いだって俺は俺だ。一体何処まで削いだら俺じゃなくなる？ 脳味噌だって半導体に置き換わる」

ホン太に続いてシマジが重ねた。

「俺に関して言えば、既に脳味噌も心臓も入れ替えた。それでも俺は俺だ。そもそも生命は動的平衡で保たれているんだ。でも、そいつは完璧ではないから老いていく。俺はそこをちょっと弄ったに過ぎない。なんか粗末にしてるか？」

「なんて言うか、」クミコは腕を組んで言い放つ。「根性の問題よね」

「根性っすか？」

シマジとホン太は目を丸めて顔を見合わせた。

「いつまでも若くいたいとか、死期は自分で決めるとかってさ、なんかね」

「なんか気に入らない？」

「気に入らないわね」

クミコはゆったりと微笑む。その口元な刻まれたほうれい線が愛らしくもある。シマジはクミコをボンヤリと眺めながら、取り返しをつかないことをしてしまったのではないかと自問する。クミコだって同じようにソフトウェアに着替えるものと思っていたのだ。いつまでも若くいたいなんて、女性として当然の願いだろう。しかし、クミコは違った。

「気に入らないか」

クミコを残して自分だけがいつまでも若くいるなんて、シマジはそんなことを望んだろうか。

「あと、とっても危険な気がする。きっと、知恵の付いた大人は、いつまでも若い身体を持っているべきじゃないの。だって、今の首相だってそうじゃない。なんなの？ マッチョぶって。他家移植までして肉体改造しちゃって、まわりには最新の機械人間を集めちゃってさ。血の気が多いから勝手な憲法解釈で何しでかす分らないわよ」

クミコはブランコに座って小さく漕ぎはじめた。ホン太は頭の後ろに両手を当てたまま、四本の筋電義肢で揺りかごのように、鉄棒にぶら下がる。

「戦争して人口減らすつもりかね？」

シマジが呟けば、ホン太はクルリと大車輪をしてみせた。

「戦争になる前に、おまえらもさっさとハードウェアに着替えて火星を目指した方がいいぞ」

「私は地球で死にたいわ」

「俺も地球でいいや」

「何も永住しようってんじゃない。自由に行き来できたほうが世界が広がるだろう」

「じゃあ、次はその鉄棒からジャングルジムの天辺くらいまで飛べるようになってもらわないとね」

クミコが意地悪に微笑めば、ホン太は眉間に皺を寄せる。

「馬鹿にするなよ」

そして、ホン太は鉄棒を義肢から両手に持ち替えると、蹴上がりから倒立、続いて、逆車輪をはじめた。そのままジェットエンジンを噴射し、土煙を巻き上げながら回転を加速させる。

「おいおい大丈夫か？」

「ノープロブレン」

鉄棒を離れたホン太は真っ直ぐに打ち上がる。そして、羽を広げてもう一度噴射。

あ、いける。

シマジは不意に飛行実験の成功を確信した。すると、ホン太は空へ吸い込まれるように舞い上がる。シマジとクミコはどこまでも上昇するホン太を目で追った。このまま火星まで飛んでいってしまうのではないだろうか。

「す、すごい」

クミコが呟いた。シマジはその横顔に目を落とす。空を見上げる潤んだ瞳が太陽の光を跳ね返す。そして、白い首から続くなめらかな顎のラインに見惚れた。ホン太はついに空を飛んだ。そして、シマジはクミコと歳を重ねていきたいと強く願った。

シマジは口の横に手を当て、空に向かって叫ぶ。

「クミコ、が、スゲーって、言ってるぞおっ」

すると、喉から出たものか定かではないが、雄叫びのようなものが空に響いた。

梅干しは食えない

椎茸も好きではない。好きではないが食えないこともない。梅干しは本当に食えない。何故あんなものを顰めっ面で食わなければならないのか。

「桜より梅のほうが好き。なんかチョボっとして可愛いじゃない」

チョボとした口で言う。だからと言って梅干しが好きになる理由はない。基本的にドライフルーツ全般が嫌い。そもそもフルーツというのは、あの瑞々しさと優しい甘さが織りなすハーモニーよ。唯一食えるのはドライマンゴー。何故って、あれはスナック菓子の域に近いから。バナナチップと同類項。バナナチップが好きなのかと問われれば、そうでもない。好きではないが食えないこともない。椎茸と同階層。

「またプラム酒でも漬けようかな」

「梅酒にしようよ」

正直、去年のプラム酒は失敗だったと思うよ。いや、失敗作ではなかったのかもしれないけどさ。

プラム酒漬けたの。

梅酒漬けたの。

ぬか漬け漬けたの。

確かにその響きはプラム酒がいいだろうね。しかし、個人的な好みで言わせてもらえば三番手。甘いだけの酒を飲み続けるってのは、ちょっと。

「なんで梅干し嫌いなのに梅酒は飲むの？」

「なんでって、全く別物だろう」

「面倒なオヤジ」

下唇を噛んで眉を持ち上げる。

「喜ぶな」

「喜ぶかつ」

咄嗟に否定はしてみたものの、本当に喜んでいなかったか。面倒なオヤジと言われ喜んでしまう理由はいくらか見当たる。だってそれでも寄り添ってくれるんだぜ。だったり。被虐愛的な某。だったり。

「あ、明日は一日社内会議だ」

「なにそれ？ お弁当作れってこと？」

上唇を噛んで眉を顰める。

「前の日にいきなり言うの止めてって言ってるでしょう」

本当に悪いと思っている。

「梅干しぎっしり詰め込んでやる」

二段弁当箱の一段目には日の丸弁当。そして、二段目にはぎっしりの梅干し。

「何笑ってんのよ」

面倒なオヤジだという自覚はある。面倒な彼氏だった過去、面倒な餓鬼だった時代を乗り越えて来たのだ。

「あいつ、そろそろ学校から帰ってくるか？」

理由もなく取得した有給休暇の正しい過ごし方がいまいち分からない。

「もう待ち伏せして、喜んでくれる歳じゃないよ」

散歩なんてことをするようになるもんだ。ようやく暖かくなってきたかと思えば、雲がかかればまだまだ肌寒い。

「帰るか」

チョボとした口に指先があてられた。晩飯と弁当の食材の配分でも考えているのか。きっと上手いことやってくれるのだろう。いい塩梅の答えが出ることを願いつつ、下唇を噛んでしばしチョボとした梅の花を見上げた。

夜こわい

「夜が怖くないと思えるようになったのは、割りと最近のことだと思う。本当はまだ怖がっているかもしれない」

餓鬼の頃、夜遅く帰ってくる親父を部屋の窓から見下ろしながら、絶対に大人になんかなれないと思った。だって、こんな真っ暗な道を一人で駅から歩いて帰るんだ。危ない人間がいるから。そんなんじゃない。何か出るって。人間ではない、見たくもない魑魅魍魎がいつか絶対出てくるって。

夜道を一人歩くようになったのは、中坊になった頃からか。冬場の部活の帰り道、カズとボンチは一緒だけれど、俺だけ一人になる分岐点。その先のトンガリ公園なんて絶対何かいたよ。誰もいるはずない夜の公園でブランコがキィと音を立てたことがあった。俺は脇目も振らず家まで猛ダッシュ。部活の走り込みだって、あんなに脚を回したことはない。

やがて彼女なんてのができると夜が怖いなんて言われてられなくなるじゃない。結婚なんかしてさ、餓鬼なんて拵えると、かつての親父が俺になってるわけ。夜が怖いなんて言っていたら何も務まらないじゃない。

「で、結局、まだ怖いのかよ」

「一体おまえは誰なんだ？」

「あんたの子だろう。気でも違ったか」

どうもそうではないような気がするのだ。

「本当は山川、草木や石に宿る精霊の類いなんだじゃないのか？」

「爺さん、しっかりしなよ。孫ならともかく、あんたの息子は、もうこんなオッサンだぜ」

結局、俺は生涯を通じて闇夜が怖かった。あの世もまた闇の世なのか。そもそもそんなもの存在しないか。無となれば、それはまた大問題だ。

「なあ、おまえは夜が怖くないのか？」

「爺さん。そんなんで父親が務まると思うか？」

あいつはきっと魑魅魍魎の類いなのだ。

俺におう

休日は図書館からブックオフ経由で蔦屋に回れば満足だ。妻はカレーを拵え、ママ友とショッピングにディナーを楽しむという。早々に帰宅した俺は、誰もいない部屋で微かなカレーの匂いを吸い込み、一先ずシャワーを浴びた。

下ろし立ての家着を纏い、リクライニングチェアに身体を沈め、一〇八円で購入した文庫本を開いた。その時点で気になることは何もなかった。はじめて手に取った作家の本は解説から読む質だ。多少でも人となりを知らなければ作品に入り込めない。幾らか読み進め、俺は鼻をすする。どうも解説すら頭に入らない。嗅細胞が何やら揮発性の化学物質を検知したようだ。

まず疑うは手垢にまみれたこの古本、鼻先を近づけるが異常はない。カレーではない何かが臭う。リクライニングチェアを立ち上がり、シートからバックレスト、ヘッドレストへと鼻先を這わせる。臭いの源泉は見つからない。やはり疑うは俺自身か。家着を脱ぎ捨て、スウェットの上下を鼻に寄せる。

「むっ」

少し匂いが強まったように思う。ついには全裸になって、シャツやパンツにも鼻を寄せる。続いて、両腕を突き上げて脇の下を確認、最後には勢いよく前屈、股ぐらにまで鼻を寄せる。臭いの源泉を探そうにも、いずれも微かに違った臭いを放っている。時計を見上げれば、そろそろいい時間だ。この際、頭からカレーをかぶってしまおうか。カレー臭だよなんて、嗚呼。

間もなく娘が帰宅する。そして、俺は洗面所で鼻毛チェック。

パパ臭い。

鼻毛出てるよ。

それだけはなんとしても避けなければならない。俺は身震いし、なんとか二人きりの夕食を成功させるべく、大量のブレスケアを口に放り込んだ。

我おもう

無と言うには随分とざわついている ひどく不規則な某で満たされなんとも居心地が悪い 不規則だなんて言ってはみたけれどそう決めつけるのはまだ早い 有るってのは簡単だけど無いってことを証明するのはなかなか難しいのだ 本当にここに規則は無いのかぐるぐると回りながら辺りを見回す 縦に何度 横に何度 回転したろうか観察の結果 どこもかしこも同じように揺らいでいる興味を引くようなものはまるでない期待できそうもないから気落ちすることもない 申し分無いとても穏やかな気分だ それでも少しだけ居心地の悪さを感じるのはなんだろうなにか予感があるのだ 無から有が生まれる確率 それはゼロにならないそもそもここが無だとも言い切れない 混沌というほうが適当かこのひどく不規則な某は拡大を続けているようにも思える全体として大きな流れの中にいるようでもある

「ちょっとお、いい加減に早く出てよ」

途端、俺の思考は停止する。持ち込んだ新聞は強く握られただけで、実はまるで読んでいない。時折、肛門から外へと押し出されるあいつ等を思いながら気張るのを止める。そして、宇宙誕生以前の不安について思いを馳せもするのだ。

くびのけ

何気なく首の後ろに手をまわせば、一本の毛が飛び出していることに気づく。太く強い毛だ。こんなもの以前から生えていたのだろうか。急に伸びてきたのだとすれば、それは何を意味するのか。更年期障害によるホルモンバランスの乱れかしら。しかし、更年期にはちと早い。

摘まんで軽く引いてみる。すべての髪の毛はこの首の毛につながっていて、どんどん引き出せばシュルシュルと髪の毛が縮んでいき、一本の長い首の毛として引き出せたりして。

毛根を圧してみれば、嗚呼、うまい具合にツボに入る。実は延髄あたりの神経細胞が誤って表に飛び出し、角質化したものだったのよ。適度に引っ張ってあげると脳が活性化されて、老化防止に役立つのよ。

毛の先まで撫でてみれば、長さは五センチ程度かしら。それは日に日に伸びていき、やがてグルグルと身体中に巻きつく。ついには俺を呑み込み大きな繭となった。月日が経ち、永い眠りから覚めた俺は羽を広げる。そして、水爆実験を強行した大国ロリシカを襲撃するのだ。モスラ～や♪

不意に頭上でフィラメント白熱電球が灯る。そして、アラフォー世代には懐かしいあの歌、パオパオチャンネルよりピッカピカ音楽館の名曲が過ぎる。

誰がはじめにつくったか パッと電球 明るい電球

誰がはじめにつくったか トーマス＝エジソン♪

夜になれば、俺の頭が電気スタンドとして、首の毛を引けばパッと頭が光るとか。はたまた目から怪光線が飛び出るとか。

そんな馬鹿なことばかり言っちゃいけない。産まれながら誰しも一本ずつの首の毛を持っているのだ。それを後生大事に守り抜くこと。それこそが人生ではないか。

俺は鏡台に向かって眉毛を整える妻の背後に立つ。すると、彼女は小さなハサミを眉の上で構えたまま、鏡越しに俺を見た。

「なによ？」

「いや、おまえには無いなって」

どうやら妻に首の毛はないようだ。

「なにが？」

「なんか、急に生えてきんだよな」

俺は鏡に背を向け、首の毛を指さした。途端、何かが首に触れた。嫌な予感がして俺は首の毛を摘まむ。いや、摘まもうとした。しかし、親指と人差し指の間には摘まめるものなど存在しなかった。慌てて振り返ると、目の前にはハサミを構えた非情な女と切り離された首の毛。

「おいっ、ヒトのものを勝手に何するっ」

「このムダ毛？」

妻は一本の毛を少し前へ突き出した。俺は絶句して目を瞬く。そして、一時間近くも無駄に悩ませた首の毛に再び焦点を合わせた。

ラ・メゾン・デュ・トワレ

ここが高級住宅街と言われる前から大学はあったのだ。何を血迷ったか大学院に行くなどと言い出した俺は、往復四時間の通学時間を勉学に当てたいとアパートを探すことになる。しかし、どの不動産屋に顔を出しても、両親を説得できるような物件は出てこない。困り果てていたところ、ゼミで一緒だった男が自分の家に住めばいいと言い出した。聞けば、なんと風呂トイレ別で想定していた家賃を十分に下回る。そして、駅から大学へ伸びる商店街から一本路地に出たところだという好立地。

「新しいとは言えないがな。就職したら一旦は実家に戻るつもりだから、テレビや冷凍庫なんかも置いていくぞ」

「マジか」

ゼミ仲間とは言っても、学外の付き合いは殆どない奴だ。アパートを訪ねたことはなかった。

「決める前に一度は見ておいたほうがいいだろう」

いつだって休日と変わらない俺たちだが、週末の昼過ぎに約束を取り付けた。

「一人暮らしは初めてだっけ？」

「そうだな」

「人生変わるぞ」

上から目線な発言に多少カチンとくる。ゼミの中でも優秀で、早々と地元の優良企業に内定した奴だから尚更だ。進学を選んだ自分が遅れをとっているように思うことがあるのだ。バイトの時間にはまだ早いが、俺はゼミ室を後にする。すると、あいつの声が追いかけてきた。

「あらかじめ言っておくけど、便所がちょっと変わってっから」

カマドウマが跳ねていた婆ちゃん家のポットン便所が思い浮かび、俺は顔をしかめた。

結局、俺はあいつから引き継いだアパートに暮らしている。ゼミから戻ると、玄関で靴を脱ぎ、冷凍庫に冷やされたペットボトルの水道水を呷った。そして、腹を空かせた俺は、大量に作り置きしたカレーに火をかける。コトコトと音を立てはじめれば、平皿に冷や飯を盛り、熱々のカレーをたっぷりと掛けた。

スプーンとカレー皿を手に六畳間へ、サイドボードにそれを置く。そして、部屋の中央に鎮座する便器の前でパンツを下ろし腰かけた。

キッチン、風呂、六畳の便所。初めて内見をした時には、その間取りに唾然とした。しかし、全てを手が届く所に置いていけば、これほど便利な部屋もない。実家にいる時から便所に漫画本やスマホを持ち込んで長居するのが好きだった。出すものを出した後、

すっきりとした身体と開放感のある下半身で思考をする。大学院への進学を決断したのも便所だった。

右手のサイドボードを引き寄せて、リモコンでテレビチャンネルを回しながらカレーを食らう。食道に流し込まれた飯は、胃でゲル化され、小腸で消化され、栄養分が取り込まれる。大腸ではミネラルや水分が搾り取られ、不要なものは糞便となって垂れ流された。

身体が満ちれば、左手のサイドボードを引き寄せてラップトップ PC を開いた。本棚に手を伸ばしていくつかの文献を手にする。自ら打ち立てた仮説を裏付ける論説を見つけると、キーボードを叩いてそいつをファイルした。そして、こんなテレビCMがあったろう。便座に腰掛けたままオーギュスト・ロダン制作のブロンズ像のようにして思索にふける。そんな時、俺はこの上ない充実感を覚えるのだ。

刈りたての小僧

刈りたての小僧の頭を洗うのはきっと楽しい。柔らかな髪に隠れていた結び目が露わになり、そっと解いて脳味噌を覗き見る。そして、風呂場の灯りを落とした。

「なあアメリカン・ドッジボールってなんなんだよ？」

脳味噌はぼんやりと光を放ち、浴室に映し出す。どうせ昼間のことなんて、夜になれば大半忘れている。映像は未熟で、公園のブランコと思われる遊具には、大きな頭から貧相な髪を生やした女の子が揺れていた。そして、おまえたちは軟式野球ボールのようなものを投げ合っている。これがおまえらの言うアメリカン・ドッジボールだろうか。二の腕の膨れた友達が、おでこちゃんにボールを投げ込んだ。ボールはその立派な額に勢いよくめり込み、三つ目族の目玉のように輝いた。

風呂場のおまえは脳天から光を放ちながら肩を揺らして笑う。映像が乱れ、三つ目の顔は大きく崩れた。

「寒いな」

俺はゾッとして、シャワーを捻り、自分の身体とおまえの肩に湯をかける。少し熱かったろうか。おまえは身を振りヒンと鳴いた。そして、薄ぼんやりとした浴室で振り返り、真っ直ぐに俺を睨む。少年の白目には無駄な血管などなく美しい。

もう一つ気になっていたことがあるんだ。

「なあ毒入り団子屋さんって儲かるのか？」

貧相な髪を伸ばした女の子は、ブランコを止めて膝の上にナップザックをのせた。そして、竹皮に包まれた軟式野球ボールを取り出す。毒入り団子屋でえす、だって。三つ

目の友達はプラスチックのメダルと引き換えに、白目のような団子を手に入れた。一口齧れば、右の頬からぶっくり。もう一つ齧れば、左の頬からぼっこり。齧るふりをする度、頭の上にもぼんぼこりん。次々に頬が弾けて白目が飛び出す。少し伸びてきた坊主頭にぎっしり並ぶ白目。風が砂埃を巻き上げれば、柔らかな毛髪が睫毛のようにばさばさ揺れた。

おまえはまた肩を揺らして笑う。白目たちがテラテラ明滅し、俺はゾゾツとした。

「いつもそんなことをして遊んでるのか？」

俺はおまえの頭を結び直し、シャンプーを垂らす。そして、賢くなあれと、念入りに擦った。

隅々まで磨かれた小僧は、小さな身体をバスタオルで包まれ、浴室の外へ放り出される。続いて、俺は磨り硝子の向こうの頼りないシルエットに目を細めながら、醜い肉体を磨くのだ。おまえはとても怖がりで、ドアの側から離れられない。俺は溜め息を漏らしながら湯船に肩を沈めた。

風呂から上がれば、いるはずもない小僧の残像がいつまでも焼き付いている。そして、出張先のホテルから電話をするかどうか。旦那の気まぐれに付き合わされる彼女も気の毒なもんだ。

「子守歌でも歌ってよ」

俺は電話機に向かって声を裏返す。

「あんたのママになった覚えはないよ」

「こんな小僧が出てくるかもよ」

彼女は子守歌を歌うのに、実に程よい声をしていると思うのだ。

「明日は早く帰れそう？ 買い物でもしてくれると助かるけど」

多分無理。

「調子はどう？」

「母子ともに健康です」

それはなにより。

「やっぱり男の子だと思うんだ」

「昨日は女の子だって言ってたけど」

「いや、やっぱり小僧だ。さっき風呂でさ、」

彼女はううんと唸り、俺の言葉を遮る。携帯電話を片手に重たい身体で寝返りでもうったか。

「もう寝たい。続きは帰ってきてからにして」

「りよかい。明日、帰る時間が分かったら電話するよ」

「メールでいいけど」

そうですかい。

「おやすみ」

「おやすみ」

電話を切る頃、小僧の残像はすっかり消えていた。

親父不知

先日から前歯になにかが詰まってとれない。食後に二度歯を磨き、爪楊枝で擦ってもまるでとれないのだ。

「海苔ついてますよ」

職場で女社員に耳打ちされ、歯医者に行こうかと考えはじめた。歯医者なんて何年ぶりだろうか。新卒で入社し、初任給で親不知にできた虫歯を治療して以来だ。同じ頃、親父が失踪した。初任給をたかられて一緒に酒を呑んだ夜、突如姿を眩ましたのだ。

それにしても、歯になにか挟まったからといって下さいだなんて。子供や老人じゃあるまいし、こんなことを歯医者に頼んでいいものだろうか。

事務処理の合間にネットで歯医者を検索すれば、自宅から五分もしないところに見つかった。そこは最寄り駅とは反対方向で、意外とその存在に気付いていなかった。

早速、俺は携帯電話を取り出して発信、それほど若くはないが感じのいい女の声につながった。そして、土曜日の朝一番に予約を入れる。今週はなるべく口を閉じていたほうがよさそうだ。幸い表現形が派手ではない俺に話しかけてくる同僚は少ない。

それにしても、これほどとれないとは一体何が挟まったのか。俺は便所の手洗い場で歯をむき出す。確かに海苔のように見えなくはない。黒くやや赤みがかかったようにも見える。週末までこのままで平気だろうか。そう思う反面、歯医者予約してしまった手前、それまでにとれてしまっても面倒だ。

「おい、海苔ついてるぞ」

翌日、身嗜みに無頓着な上司にまで指摘されると、いよいよ不安になる。予約キャンセルの心配はなさそうだが、歯間のそれはエリアを拡大しているようにも見える。単なる食べ滓ではないような。生きているのか。もしくは食べ滓がさらなる何かをおびき寄せたか。舌先で前歯を突けば何か抵抗力を感じ、俺は妙竹林な顔になる。

「虫歯ですか？」

海苔がついていると指摘した女社員が、目の前で眉を垂らしていた。俺を憐れむように。自分の指摘が間違いであったことを詫びるように。俺は咄嗟に顔をデフォルトに戻す。なるほど。歯間に広がる黒点は虫歯と考えるのがリーズナブルだ。

給湯室へ向かい、珍しく自販機でペットボトルの水を買う。いつもなら小銭をケチって無料ベンダーの不味い珈琲を啜るところだが、喉が渴いて仕方ない。正確に言えば口が乾くのだ。

便所の手洗い場で歯をむき出せば、歯間に風が流れ込んでいるようだ。鏡に目を凝らして、そっと指先で触れればピーと笛が鳴った。

「穴あああっ」

俺は驚いて、声をあげる。そして、引きずり込まれそうになる人差し指を懸命に引き抜いた。

穴だ。歯間の黒点はどこまでも深い穴だ。記憶がフラッシュバックする。新卒で入社した俺。初任給で親不知を抜いた俺。親父にたかられて酒を呑んだ夜。突如姿を晦ました親父。それらを時系列に並べ替えると、俺は強烈な愚考にとり憑かれた。

親父は歯間にいる。

勢いよく便所を飛び出せば、目を丸めた上司と鉢合わせする。

「なんか叫び声が聞こえたようだが、大丈夫か？」

「大丈夫ではありません。早退します」

俺は上司の横をすり抜けて事務所を飛び出した。オフィス街を駆け抜け、住宅街に差し掛かると遊具の並ぶ公園が現れた。幸いそこには砂山を拵える一組の親子しかいなかった。

俺は公園で親子に背を向けて仁王立ちになる。そして、少し腰を落とすと口の中へと片手を差し込んだ。指先が歯間の黒点に触れると見る見る手首まで吸い込まれていく。顎が外れそうになり涙が流れても、黒点は腕を飲み込む続ける。肘が鼻先まで到達したところで、俺は歯間の向こうで掌を広げた。

親父、掴まれえっ。

声をあげようにも口が塞がれている。しかし、俺の手のひらには懐かしく確かな手応え。俺はさらに腰を下ろし、黒点に飲み込まれた腕をもう一方の手で掴んで引きずり出す。産みの苦しみは下唇を頭からかぶるようなものと聞いたことがある。歯間から自分の親父を引きずり出す苦しみも同じようなものだろうか。ジリジリと自分の腕が引き出されていく。幼子と砂場で遊んでいた母親が、恐る恐る視界の端に入り込んだ。阿呆のように口を半開きにして眉を顰めている。それでもなかなかの美人だ。俺は更に力を込めて親父を引きずり出す。自分の腕が抜け出ると、その手には毛深い親父の手が握られていた。そこから俺は言葉にならない雄叫びをあげながらポゴダンス。口から親父を吐きながらヘッドバンキング。閑静な住宅街の公園で俺一人がハードコア。そして、ついに丸々太った親父を引きずり出す。乾いた空に野太い雄叫びと女の金切り声が響いた。

俺は息を切らせ、両膝に手をつきながらなんとか持ちこたえる。涎を垂らしながら横目に親子を窺えば、女は砂場で遊ぶ幼子のもとへ駆け寄り、すぐに抱え上げた。そのまま公園から立ち去るものと思いきや、じりじりと俺のそばに歩み寄ってくるではないか。

「あ、あの、大丈夫ですか？ 救急車呼びますか？」

騒ぎになるのも面倒だ。俺は咄嗟に応えた。

「結構です。歯医者予約してるんで」

女は苦笑いで斜めに頷く。続いて、視線を落として口もとを歪めた。そこには羊膜のようなものに包まれた全裸の親父が蠢いている。俺はジャケットを脱いでそっと親父に被せた。すると、女はふと何かに気づいたように幼子を下ろし、その子の頭を押さえながら深々と頭を下げた。

「おめでとうございますっ」

俺は訳が分からず目を丸めて瞬く。すると、突然親父が声をあげて泣き出した。顔を歪めて狼狽すれば、女は途端に母性を発揮。

「ほらほら、パパがしっかりしなきゃっ」

「パパあ？」

俺は女の声に気圧されて親父にのもとに膝をつく。そして、ジャケットとともに羊膜を引っ剥がすと、頭の下に手を添えて、醜い裸体を抱き起こした。

「泣くな親父っ。俺だよ、俺えっ」

親父は俺を認めるとしゃくりあげながら俺の肩を何度も叩く。俺は「俺だ」を繰り返す。その後につけるべき言葉がまるで思いつかないのだ。ここはやはり謝罪の言葉だろうか。初任給で飲みに行った夜、俺は親不知と奥歯の隙間にできた黒点から親父を吸い込んだ。そして、こともあろうにその歯間が歯間として成り立つために不可欠であった親不知を抜き取ってしまったのだ。初任給で親父に酒を奢るなんてさ、息子にしてみれば、よくできた親孝行じゃないか。俺も随分と気分良く酔っていたのだ。まさか親父を飲み込んでいたなんて思いもよらなかった。

親父は俺の両肩を掴むと、まだヌルヌルする腕を俺の首に巻きつけた。酒の臭いが鼻につく。まだ酔ってるのか。時間も空間もない歯間で時を超えたか。

「立派になったもんだなあ」

親父は酒臭い息を耳に吹きかけながら俺の頭を撫で回す。親父は泣きながら酩酊していた。

「おめでとう。おめでとう」

女も貰い泣きしながら手を叩く。不審に思っ後をつけてきた上司と女社員は哑然として立ち尽くす。俺は全裸の親父を強く抱きしめVサインを送った。

それでもいい

夏、まだ眠りから覚めない住宅地を抜けていく。朝を独り占めしたことに優越感を覚えると同時に、こんなに陽が射しているのにもかかわらず静まり返った住宅地は何処か不気味で、俺は思わず身震いした。

ガチャピンとムックとカルバマゼピン。処方された薬は効いているのだろうか。副作用は少ないが一〇倍も料金が跳ね上がる良品もあるがどっちにするかと医師に問われ、俺は安価で古くから使われているカルバマゼピンのジェネリックを選択した。しかし、副作用すら感じられない。ひどい眠気に襲われる、音感が鈍るなどと脅されていたが、副作用も出てこないとなると、本来の効果が得られているのか不安になる。

それどころか、そもそもの症状自体に自覚がないのだ。発端は知人からの指摘であった。時折、俺は舌をペロペロさせて珍妙な顔で意識を失っているというのだ。自分の知らぬ間にことが起きているとなればどうにも気味が悪い。そして、生まれてはじめて脳神経内科などというところに足を運んだ。医師の薦めで高額な検査料を支払ってMRIに押し込まれ、さらに脳波をとられたが、結果的に異常は見当たらなかった。

「MRIで見る限り、脳の血管が切れているとか、脳に腫瘍があるとか、緊急性のあるものは見あたらないですね。脳波に関しては、異常な波形が出れば完全に黒なんですけれど、出ないからといって白だと言える確率は二五%くらいなんですよ」

まったく厄介なペロペロだ。二週間ほど様子見となったが、結局、珍妙な顔を晒しながら意識を失う症状は続いた。そして、再び医師に泣きつくと、ガチャピンもといカルバマゼピンを処方されたのだ。

「運転も止めといてくださいね。事故でも起こして裁判になったら絶対に勝てないですから」医師はほくそ笑んだ。

早朝の涼しく人気のない通りを辿りながら、嫌らしい笑みを貼り付けた医師の顔を思い返し多少愉快的気分になった。肩書きを無視して人柄の悪さを見せる人間が嫌いではない。幸い活動中に意識を失ったことはなかった。知人と過ごす時間など、多少リラックスしたタイミングで起こるものなのか。前兆を感じる患者も多いと聞かすが、そんなものを感じたことはない。

最寄りの駅まで辿り着き、始発列車に乗り込む。シートの隅に席を確保できたが意外と多くの乗客がいるものだ。大きな音を立ててドアが閉まり、列車はゆっくりとレールを刻みはじめた。音感は良好。眠気に襲われることもない。俺はシートに身体を埋めて一息。幾分気を緩めれば、珍妙な顔を晒しながら列車に揺られる自分が思い浮かび、拳を握る。向かいのシートに目をやれば、正面には競馬新聞を見下ろして顔をしかめるおっさん。その隣には目を閉じたままスポーツバッグを抱える青年。俺は肩の力が抜ける。今まで赤っ恥くらい幾らでも搔いてきた。この先、強制的に晒されることになる阿呆面もご愛敬。せめて向かいのシートにガールが座った時くらいは気を引き締めて参ろうか。

奥付

奥付

Puzzle 文集 8

<https://puboo.jp/book/100345>

著者：puzzle

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/puzzle/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/100345>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/100345>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

{{-
-}}

Puzzle文集8

版番号の予定

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
